

小児事例を用いた“呼吸を安楽にする援助”シミュレーション教育プログラムの評価

著者	草柳 浩子, 小泉 麗, 伊藤 和子, 草場 ヒフミ
雑誌名	武蔵野大学看護学研究所紀要
号	10
ページ	19-28
発行年	2016-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000203/

小児事例を用いた“呼吸を安楽にする援助” シミュレーション教育プログラムの評価

Evaluation of Educational Program Simulating “Support to Ease Breathing” with Children’s Case

草 柳 浩 子¹ 小 泉 麗²
Hiroko Kusayanagi Rei Koizumi
伊 藤 和 子² 草 場 ヒフミ²
Kazuko Ito Hifumi Kusaba

要 旨

目的：小児事例を用いた“呼吸を安楽にする援助”シミュレーション教育プログラムについて教材および授業展開を学生の授業評価をもとに検討し、シミュレーション教育プログラムの洗練に向けた示唆を得る。

対象：“呼吸を安楽にする援助”演習を受講した看護学生のうち、同意が得られた105名である。データ収集は研究者らが作成した自記式の質問紙とした。

結果および考察：1)「演習過程」は概ねレディネスに即していると評価されていた。2)「演習到達度」得点は、ロールプレイ時の患者・親・看護学生役割により違いがみられ、親役割に比べ患児役割の学生が高かった。3)演習の時期が小児看護論実習前の学生は実習の準備、既に実習が終わった学生は実習経験の深めるものとして評価していた。4)ロールプレイ後の振り返りは、学生間および教員との対話や討議により、計画・実践したケアを確認し、評価する学習支援となっていることが推察された。

教育プログラムの洗練の課題は、親の状況を加えた事例の提示、実践の場に類似した演習環境の整備、評価方法についての検討である。

キーワード：小児看護，技術演習，シミュレーション，教育評価，看護学生

Abstract

Purpose : to evaluate the quality of lesson materials and appropriateness of training development for an education program that provides simulation to “support the ease breathing” with children’s cases, as well as to refine the program.

Methods : subjects included 105 nursing students who gave their consent to participate in the study after attending the simulation training to “Support the ease breathing”. Data was collected using self-administered questionnaire prepared by the researchers.

Results : 1) “Learning process” was evaluated to be generally consistent with readiness. 2) Difference in score of “practice achievement level” were observed depending on the simulated roles of patient, parent, and nursing student at the time of role playing, showing higher score in students who played the child patient’s role than those who played the parent’s role. 3) The simulation exercise was effective for the students who had participated in the program before taking the clinical practicum of pediatric nursing to

1 上智大学総合人間科学部 Sophia University, Faculty of Human Sciences

2 武蔵野大学看護学部 Musashino University, Faculty of nursing

“prepare for practice” ; while it was effective also for the students who received the training in the program after having taken the clinical practicum “deepen what they have learned during the practice.” 4) Reflection after role playing sessions with dialogue and discussion among students and teachers may be useful to help confirm knowledge and techniques of the program, as well as attitudes towards it.

Discussion : highlighted challenges for refinement of the educational program include presentation of case examples that additionally included parents’ situation, improvement of exercise environment to make it similar to actual practice settings, and review of evaluation method.

Key words : simulation learning, educational program, children case, nursing skill practice, nursing student

I. はじめに

小児看護教育においては、子どもの成長発達や健康問題、家族の状況をも含めて看護技術を実践できる基礎的能力を養うことを求められている。これを看護技術教育として考えると、原理原則を適用しながら実践する初期の段階から、子どもや家族の状況を判断し、意思決定しながらケア関係をもとに実践する段階への実践能力が求められる。看護実践能力の教育において、「厚生労働省看護教育の内容と方法に関する検討会」(2011)は、臨床実践に近い状況を想定した演習の強化と充実を図ることを指摘している。教育の手法としては、患者の状態や環境を学習者のレディネスに合わせて模擬的に再現した環境での体験型学習であるシミュレーション看護教育が開発されている(阿部, 2013)。

2001年以降のわが国の看護基礎教育における小児看護技術演習の動向の検討から、事例を用いたロールプレイを教育施設で取り入れている動向が明らかになった(花房, 小泉, 草柳, 草場, 2014)。これらの演習においては、小児看護に関する知識を学んだ学生が、設定された臨床の看護場面において、看護師役の学生が、患児・親などの役割を演じる学生との間で看護を実践し、看護技術を学ぶように授業設計がなされており、シミュレーション教育と言える内容を含む学習方法であった。しかし、事例の提示の内容や方法、事前学習の有無や程度、振り返りの有無や程度、学習効果や授業評価の内容や方法に関しては様々であり、詳細に記述された報告は少なかった。特に、目的とする実践課題に即した事例情報を学習教材として検討・評価している論文はなかった。また、子どもと触れ合った体験や生活体験の少なさから、子どもをイメージできなかったり、退院後の生活が具体的に考えられなかったりという状況に陥る学生が、子どもの発達段階や年齢、疾患、実施す

る援助技術、家族の様子など、状況設定だけでは子どもや家族のことをイメージし、技術演習に参加することに困難を感じる現状も実感している。

そこで、子どもへの看護実践へ向けたより高い教育効果を得るために、学生が演じる子どもや家族に関するシナリオを作成し、小児事例を用いたシミュレーション教育プログラムを実施した。そこから見えてきたシミュレーション教育プログラムのあり方を分析し、今後より効果的な小児看護技術演習を探究するための資料としたいと考えた。

II. 目 的

小児事例を用いた“呼吸を安楽にする援助”シミュレーション教育プログラムについて教材および授業展開の適性を学生の授業評価をもとに検討し、シミュレーション教育プログラムの洗練に向けた示唆を得る。

III. 本学のカリキュラム

1. 技術演習科目の特徴

A大学では、小児看護技術演習を3年の前期・後期に開講する成人・老年・母性・小児・精神領域の統合された科目(看護実践統合演習2-2)内で実施している。後期科目の到達目標は「1. 特定の健康問題や健康課題をもつ対象への援助技術を、既知の知識や理論などを活用し、その状況に応じて創意工夫する。2. 特定の健康問題や健康課題をもつ対象への安全・安楽・自立に配慮した援助技術の提供に主体的に取り組み、グループメンバーと協同的に活動できる。」である。小児看護領域では、後期の技術演習でシミュレーション教育を基盤にした、体験型の学習を取り入れている。カリキュラムにおける演習と実習の位置づけを表1に示す。

表 1 3 年次カリキュラム（演習と実習の位置づけ）

前期		後期	
1 ターム	2 ターム	3 ターム	4 ターム
看護過程演習 看護技術演習（前半）	領域別実習（6 単位）	看護技術演習（後半） （小児シミュレーション演習）	領域別実習（6 単位）

2. 小児シミュレーション演習

1) 学習目標

- (1) (患児情報から) 子どもの状態をアセスメントできる
- (2) 呼吸を安楽にするケアを子どもに理解してもらうための実践ができる（パンフレット、おもちゃなどの補助道具を作成する）
- (3) 呼吸を安楽にするケアを実践できる

2) 方法

- (1) 学生は 3 ～ 4 名程度のグループとなり，設定された状況下でのケアの実践を，患児，親，看護学生の役割に分れ演じた。
- (2) 本演習での患児や親の状況とシナリオを提示し，自己学習期間は 1 週間とした。
患児は気管支喘息と診断された 3 歳 6 ヶ月の女児とした。
その他に，入院時検査データ，治療内容，今朝の子どもの様子，親の様子とシミュレーションのためのシナリオを提示した。
- (3) 教員はグループ発表時の学生への関わり，発表後の振り返り時の教員の基本姿勢に関する資料を作成し，振り返りが学習へ繋げられるよう教員間で統一した指導が行えるようにした。
ロールプレイ後の振り返りは，実践したケアや行動について，グループ学生間，グループ外の学生，教員との対話や討議によっておこなった。
- (4) シミュレーション演習でも使用できるよう，前期に課題レポートとして，①呼吸器疾患を持つ子どもと家族への援助，② 3 歳の成長発達の提出を学生に課している。

3. 履修学生のレディネス

後期技術演習の教育プログラム作成にあたり，学生のレディネスの違いに留意する必要があった。この科目の開講時期は 3 年後期であり，既に全員が 6 単位の領域実習を前期に履修している。しかし，小児看護論実習を終了した学生は 50%のみであり，他の学生は後期の技術演習後に履修することになっている。この学生の 2 つの状況に対応するため，その特性の生かす方法として，実習経験者と未経験者

験者によるグループを編成し，グループワーク学習を取り入れた。シミュレーションにおける役割は，グループの学生同士が話し合って決定した。

Ⅳ. 研究方法

1. 対象者

A 大学看護学部 3 年生のうち，看護実践統合演習 2-2 の小児事例を用いた“呼吸を安楽にするための援助”シミュレーション教育プログラムに出席し，研究参加に同意をえられた学生である。

2. データ収集

自己記入式無記名の質問紙は先行文献を参考に作成した。演習過程の評価は教材および演習方法に関する項目として 9 項目作成した。このうち，舟島らの授業過程評価スケール—看護技術演習用—（舟島，杉森，2000，pp.37-45）の，「学生間で協力をしながら進められた」は原文のままで，「演習の内容に対して授業時間は適当であった」，「演習は現実の看護場面をイメージするものであった」は一部変更して使用した。また，阿部（2013）のシミュレーションの評価に関連する内容も参考にした。演習到達度の項目は，小児看護技術演習における学生の学びや特徴を明らかにしている先行研究（花房，小泉，草柳，草場，2014；服部，谷口，長谷川，石井，2012；大木，出野，中尾，長岡，本間，2002；谷口，石井，長谷川，長谷部，2012）を参考に作成した 10 項目である。次に，小児看護技術演習との関連を検討するために，小児看護論実習を既に経験した学生に「小児看護論実習経験の深まり」2 項目，未経験の学生に「小児看護論実習の準備」2 項目を設けた。評価方法はすべての項目において「非常に当てはまる」「かなり当てはまる」「大体当てはまる」「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」の 5 件法とし，5 ～ 1 を付与した。①教員の指導，②物品や演習環境などに関する意見や要望は，自由記述とした。

対象者の属性は小児看護論実習経験の有無，ロールプレイ時における役割（患児，親，看護学生）とした。

演習後に質問紙を配布し，回収ボックスで回収した。

3. 分 析

「演習過程の評価」, 「演習到達度」, 「小児看護論実習体験の深まり」・「小児看護論実習の準備」は, 記述統計量を求めた。「演習過程の評価」と「演習到達度」については, 因子分析で構造を確認し, 属性との関連をt検定, 一元配置分散分析を用いて比較した。統計解析は, SPSS 22.0 for Window を用い, 有意水準は両側 5% とした。自由記述は, ひとつの箇条書きごとに, 短文において複数の内容が含まれている場合は一つの意味ごとにデータとして, 内容の類似したもので分類した。

4. 倫理的配慮

所属機関の倫理審査委員会にて承認(2604-1)を受け実施した。研究対象者には本研究の目的, 方法, 個人情報の保護, 自由意志の尊重, また個人の授業評価には反映しないこと(質問紙の開封は成績確定後に行う), 研究結果の公表への協力などを明記した参加依頼文を用いて, 教員が口頭で説明した。

V. 結 果

1. 研究協力者

質問紙は105名の学生(回収率97.2%)から得られ, すべてを有効回答とした。

属性は表2に示した。小児看護論実習を既に終了している学生(以下, 実習経験あり)が53名(50.5%), 次のタームで実習予定の学生(以下, 実習経験なし)が52名(49.5%)であった。演習のロールプレイ時の役割は患児あるいは親が29名ずつ(27.6%), 看護学生が47名(44.8%)

であった。実習経験あり・なしにみた各役割の割合は類似していた。

表2 学生の属性

n=105

		n	%
小児看護論実習経験	あり	53	50.5
	なし	52	49.5
ロールプレイ時の役割	患児	29	27.6
	親	29	27.6
	看護学生	47	44.8

2. 演習過程の評価

各項目の平均と標準偏差, 最小値と最大値を表3に示した。項目の平均値は“シナリオは看護場面をイメージできるものであった”の3.5から“学生間で協力しながらすすめられた”4.4の範囲であった。これを度数でみると, 3.0以上に回答した割合は92.4%~98.1%の範囲であった。

構造を確認するために因子分析を行った。項目5「学生間で協力しながらすすめられた」, 項目7「グループワークの人数は適切であった」に天井効果が見られた。そのため, これら2項目を除いた7項目について一般化された最小2乗法からプロマックス法による因子分析を行い, 固有値1以上において解釈可能な2因子が抽出された(表4)。因子1は〈教材の適切性〉, 因子2は〈演習への取り組み〉からなる構造として示された。因子相関は.555であった。Chronbach' α 信頼係数は, 「演習過程の評価」の全因子が.766, 因子1が.733, 因子2が.593であった。

表3 「演習過程の評価」の得点

項 目	n	平均値	標準偏差	最小値	最大値	3.0 以上 %
1. シナリオは看護場面をイメージできるものであった	105	3.5	0.74	2	5	97.1
2. 前期に作成した課題レポート①②で得た知識を活用できる演習であった	105	3.8	0.88	1	5	94.3
3. 演習はこれまで学んだ知識を統合できる内容であった	105	3.7	0.76	1	5	98.1
4. 演習には主体的に取り組めた	104	4.2	0.75	2	5	98.1
5. 学生間で協力しながらすすめられた	105	4.4	0.71	2	5	98.1
6. 演習の内容にたいして演習時間は適切であった	105	4.0	0.96	1	5	92.4
7. グループワークの人数は適切であった	105	4.2	0.94	2	5	94.3
8. 事例を活用しての演習は効果的であった	105	4.2	0.79	2	5	98.1
9. またシュミレーション演習をやってみたいと思う	105	3.7	0.83	1	5	96.2

表4 「演習過程の評価」の因子分析

n=104

質 問 項 目	因子負荷量		共通性
	因子 1	因子 2	
9) また、シミュレーション演習をやってみたいと思う	.738	.534	.596
8) 事例を活用しての演習は効果的であった	.703	.322	.520
1) シナリオは現実の看護場面をイメージできるものであった	.556	.251	.356
3) 演習はこれまで学んだ知識を統合でできる内容であった	.542	.493	.382
2) 前期に作成した課題レポート①②で得た知識を活用できる演習であった	.483	.342	.291
4) 演習には主体的に取り組めた	.395	.856	.745
6) 演習の内容に対して演習時間は適切であった	.382	.541	.372

因子抽出法：一般化された最小2乗，Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

2 因子の累積寄与率 43.0%

因子間相関は .555

3. 演習到達度

各項目の平均と標準偏差，最小値と最大値を表5に示した。各項目の平均値は“病気の子どもの理解を深めることができた”の3.6から“親へのケアや配慮について学ぶことができた”4.2の範囲であった。また，度数でみると，3.0以上に回答した割合は93.3%～99.0%の範囲であった。

構造を確認するために因子分析を行った。天井効果，フロア効果の項目は見られなかった。そこで，全10項目に

ついて一般化された最小2乗法からプロマックス法による因子分析を行い，固有値1以上において解釈可能な3因子が抽出された（表6）。因子1は〈看護ケアの実践〉，因子2は〈看護ケアの根拠づけ〉，因子3は〈病気の子どものコミュニケーション〉からなる構造として示された。因子間の相関は.442～.626であった。Chronbach' α 信頼係数は，「演習到達度」の全因子が.851，因子1が.782，因子2が.787，因子3が.777であった。

表5 「演習到達度」の得点

	n	平均値	標準偏差	最小値	最大値	3.0 以上 %
1. 病気の子どもの理解を深めることができた	105	3.6	0.80	1	5	94.3
2. 子どもとのコミュニケーション方法を学ぶことができた	105	3.7	0.86	1	5	93.3
3. 子どもの気持ちを尊重する方法を学ぶことができた	105	3.9	0.80	2	5	95.2
4. 『呼吸を安楽にするケアを子どもに理解してもらうための実践』に関する根拠を考えることができた	105	4.0	0.76	2	5	97.2
5. 『呼吸を安楽にするケアを子どもに理解してもらうための実践』を具体的に考えることができた	105	4.1	0.70	2	5	99.0
6. 計画した実践を子どもや親または看護学生の言動を見ながら行えた	105	3.9	0.85	1	5	95.2
7. 作成した援助用具は子どもに適切なものであった	104	3.7	0.82	2	5	95.2
8. 呼吸を安楽にするケアを実践することができた	105	3.9	0.79	2	5	95.2
9. 子どもの看護技術の特性を学ぶことができた	105	3.8	0.74	2	5	96.2
10. 親へのケアや配慮について学ぶことができた	105	4.2	0.70	2	5	99.0

表6 「演習到達度」の因子分析

n=104

質 問 項 目	因子負荷量			共通性
	因子1	因子2	因子3	
9) 子どもの看護技術の特性を理解することができた	.742	.528	.347	.610
10) 親へのケアや配慮について学ぶことができた	.692	.617	.431	.599
8) 呼吸を安楽にするケアを実践することができた	.646	.414	.398	.460
7) 作成した援助用具は子どもに適したものであった	.632	.267	.371	.491
6) 計画した実践を子どもや親または看護学生の言動を見ながら行えた	.585	.559	.379	.467
5) 『呼吸を安楽にするケアを子どもに理解してもらうための実践』を具体的に考えることができた	.484	.931	.360	.885
4) 『呼吸を安楽にするケアを子どもに理解してもらうための実践』に関する根拠を考えることができた	.512	.716	.370	.588
2) 子どもとのコミュニケーション方法を学ぶことができた	.385	.282	.823	.710
3) 子どもの気持ちを尊重する方法を学ぶことができた	.505	.404	.715	.559
1) 病気の子どもの理解を深めることができた	.430	.387	.688	.554

因子抽出法：一般化された最小2乗，Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

3因子の累積寄与率54.569%

因子間相関は，因子1と因子2間で.626，因子1と因子3間で.557，因子2と因子3間で.442

4. 「演習過程の評価」および「演習到達度」の関連要因

1) 小児看護論実習経験のあり・なし

「演習過程の評価」及び「演習到達度」の各因子平均得点を，小児看護論実習経験のあり・なしにより比較した。「演習過程の評価」及び「演習到達度」の全因子得点において，実習経験なしの学生の方がわずかに高かったが，全因子及び各因子の全てに有意な差は認められなかった。

2) ロールプレイ時の役割

「演習過程の評価」及び「演習到達度」の各因子平均得点を，ロールプレイ時の役割により，一元配置分散分析から tamhane の多重分析を用いて比較した結果を表7に示した。「演習過程の評価」においては，患児・親・看護学生の役割による全因子および各因子の得点には有意な差は認められなかった。ただ，全項目合計点の平均値及び因子1〈教材の適切性〉では，患児と看護学生役割が親役割の

表7 「演習課程の評価」「演習到達度」とロールプレイ時の役割との関連

n=104

	ロールプレイ時の役割			p 値	多重比較
	患児	親	看護学生		
演習過程の評価 因子1：教材の適切性	19.1 ± 2.53	18.3 ± 1.90	19.0 ± 3.34	n.s	n.s
因子2：演習への取り組み	8.1 ± 1.48	8.2 ± 1.29	8.2 ± 1.55	n.s	n.s
全 項 目	27.2 ± 3.48	26.5 ± 2.77	27.2 ± 4.31	n.s	n.s
演習到達度 因子1：看護ケアの実践	20.3 ± 2.98	18.6 ± 2.39	19.5 ± 2.92	n.s	n.s
因子2：看護ケアの根拠づけ	8.3 ± 1.19	7.7 ± 1.30	8.2 ± 1.39	n.s	n.s
因子3：病気の子どもとのコミュニケーション	11.5 ± 2.14	10.6 ± 1.99	11.3 ± 2.00	n.s	n.s
全 項 目	40.1 ± 5.29	36.9 ± 4.36	38.8 ± 5.22	0.05	患児＞親※

一元配置分析，Tamhane，n.s=not significant

※ p > 0.05

学生に比べ得点がわずかに高く、一方、因子2〈演習への取り組み〉では、親役割が患児と看護学生役割の学生に比べ得点がわずかに高かった。

「演習到達度」では、全因子得点に効果が認められ多重分析を行い、全項目合計点の平均値において患児役割の学生は親役割の学生に比べ有意に得点が高いことが認められた。3因子では有意な差は認められなかったが、患児役割の学生の得点が最も高く、次いで看護学生役割、親役割の順であった。

5. 「小児看護論実習経験の深まり」と「小児看護論実習の準備」

小児看護論実習経験あり学生「小児看護論実習経験の深まり」と、実習経験なし学生「小児看護論実習の準備」の各項目の平均、標準偏差、最小値と最大値を表8に示した。

「小児看護論実習経験の深まり」の下位項目、〈小児看護論実習の経験がシミュレーションに活かされた〉〈シミュレーション演習は、小児看護論実習での学習をより深める

ものであった〉の平均値は3.7と3.6であった。得点の低い「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」の割合は13%と17%であった。Spearmanの相関分析において、2項目には相関があった($r=.523$, $p<.001$)。

「小児看護論実習の準備」の各項目の平均値は4.0と4.4と高く、天井効果が認められた。得点の低い「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」の割合は0%と8%であった。Spearmanの相関分析において、2項目には相関があった($r=.454$, $p<.002$)。

6. 事例、物品・環境、教員の指導への意見や要望

教員の指導などに関する意見や要望は28名、物品や演習環境などに関する意見や要望は15名からの記載があり、合わせて52件のデータが抽出された。これらは事例、ロールプレイの方法、演習の準備、教員や学生からのフィードバック、演習での学び、その他の6つに分類された(表9)。

表8 小児看護論実習に関連した学び

		n	平均値	標準偏差	最小値	最大値
小児看護論実習 経験の深まり (実習経験あり)	小児看護論実習の経験がシミュレーションに活かされた	53	3.7	1.14	1	5
	小児看護論実習経験での学習をより深めるものであった	53	3.6	0.95	2	5
小児看護論実習の準備 (実習経験なし)	小児看護論実習を終えた学生の経験から学ぶことができた	46	4.0	1.01	1	5
	小児看護論実習に向けての準備や学びとなった	46	4.4	0.68	3	5

VI. 考 察

1. 演習過程について

「演習過程の評価」各項目の平均得点は3.5以上であり、「大体当てはまる」～「非常に当てはまる」の割合は92%以上、また小児看護論実習経験の有無のよる有意な差はないことから、学生の評価からみた「演習過程」は概ね適切なものだったといえる。このうち、〈演習の取り組み〉や進め方に関する項目の得点は高い傾向にあり、“学生間で協力しながらすすめられた”“グループワークの時間は適切であった”には、天井効果が認められた。天井効果が認められるのは、回答者のプライバシーが守られない時、または質問内容の表現が適切でなかった時が考えられる(Blair G., & Imai K., : 2012)。本研究ではデータ収集を教員が授業評価として学生に対して実施しているため、授業

に対する学生の態度として、望ましいと思う考えが回答に反映されていたこと、また質問の表現が適切でなかったことが、回答の偏りの可能性として考えられる。しかしこれらの質問項目は、「演習過程」の評価内容として必要な内容であり、データ収集の方法、質問内容の工夫など、バイアスを最小限にするための検討が必要である。

構成因子〈教材の適切性〉の下位項目“看護場面をイメージできるものであった”の平均得点は3.5と全項目中最も低かった。学生が問題解決や自己の意思決定に基づいて役割を演じるロールプレイ演習において、学生のレディネスにそった状況設定は非常に重要である(花房、小泉、草柳、草場、2014)。今回の演習では、学生が患児・親・看護学生の役割を演じて看護を展開することを目標に、子どもの成長発達、疾患・病状、親への関与をもとに場面設定やシナリオを構成した。演習への要望等に関する自由記

表9 意見・要望についての自由記述

() は記述数

項目	記述内容	
事例 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・事例が詳しく設定されていた方が良かった (2) ・1つの疾患でなく色々な疾患でやるとイメージが広がる (1) ・実際の子どもについてもっと意見があればイメージがしやすい (1) ・3歳児を想像で行うのは難しいので、ビデオ等を見せてもらおうとわかりやすい (1) 	
ロール プレイ (5)	役割	<ul style="list-style-type: none"> ・役割を他グループの学生に演じてもらった方が良かった (2) ・子どもの感情や行動がわからないことも多く、患児役になりきってくれる人がいると良かった (1)
	取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数のグループだったので主体的に意見を出せた (1) ・準備の時間が限られている中でも協力してできた (1)
教員や他 学生による フィード バック (12)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護を深められる適切なコメントをもらえた (5) ・グループ毎に、それぞれの良い点、改善点を教えてくれ、プラスになった (3) ・わかりやすい指導だった (1) ・フィードバックを受ける時間があって良かった (1) ・時間をかけて考えた計画に賛同してもらえ、自己効力感をえた (1) ・3グループに分かれた事で、教員によって指導や学びに差があるのではないかな不安 (1) 	
準備 について (16)	行事や他領域 との重なり	<ul style="list-style-type: none"> ・他の演習や課題もあり熟考することができず大変だった (2) ・行事などで物品の準備をする期間が短く、時間がたりなかった (紙芝居など) (2)
	グループワ ークの時間不足	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し準備に時間が欲しかった (1) ・授業内にグループワークをする時間をもっとあれば良かった (1) ・時間があれば凝ったおもちゃを作って子どもの集中力を引きつけたかった。でも、臨床では簡単にできるものが忙しさを考えると適切なのか (1)
	演習で用いる 物品の準備	<ul style="list-style-type: none"> ・材料 (持ち手つきコップ、画用紙の種類など) がもっと欲しかった (4) ・事前に演習時に使う物品 (吸入器、点滴) についての情報があり練習に使えたと良かった (3) ・文具の用意があり良かった (2)
演習で の学び (9)	実習との関連	<ul style="list-style-type: none"> ・実習へのイメージが付き今後のためになると思う (2) ・他のグループの工夫などが分かり実習に活かせる実習経験を活かす事ができ、楽しかった (1) ・子どもの気持ちの理解が深まったというより、実習経験を確認しているようだった (1) ・実習後であったため、行く前に学びたかった (1)
	グループワ ークの学び	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の課題をみつけることができた (1) ・違う考えもあると考えることができた (1) ・一人の意見より人数が集まって意見交換を行うことができて良かった (1) ・前期演習では講義時間内で役割やケアの内容を考え発表したが、後期演習は準備期間が長かったの でより学びが多かった (1)
その他 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・良かった (1) ・文具を家に持ち帰ることができたら良かった (1) ・発言しない人も自分の思いや考えを持っているので、当ててもよいと思う (1) ・物品が全て借りられてしまった時に不便なので借りる時に名前の記入をした方がよい (1) ・アセスメントがっているのか不安で、その不安なアセスメントでケアを計画したのでケアも不安だった (1) 	

述の中にも、事例をより詳しく、具体的なイメージが出来るようにビデオを見るなど具体的な方法があげられている。「演習過程の評価」をロールプレイ時の役割別に見ると、有意な差は見られなかったが、親役割の学生の得点が最も低いことから、特に、親はどのように反応するのか、子どものケアに参加していくのかなど親の立ち位置の方向性を示し、そこから状況が検討できるような場面設定が必要だと考えられた。

演習への教員の関わりについては、自由記述において、看護を深められたなど振り返りを通しての支援が有効であったことを示す記述があった。振り返りは、実施した行

為を裏付ける、知識・技術・態度を確認する学習支援 (阿部, 2013, p.101) 方法として、シミュレーション教育における教育過程の一つである。今回、振り返りについては、事前に教員間で方法を検討し、ロールプレイ発表後に振り返りの時間を設けること、振り返りが学習に繋がるように支援する方針で臨んだ。振り返りを通して学生は、自分たちが計画し実施したケアを分析・評価し、次につながる学習への動機づけになっていたことが考えられた。

2. 演習による学び

シミュレーション演習の学習到達度の評価尺度として作成した「演習到達度」各項目の平均得点は3.6以上、「大体当てはまる」～「非常に当てはまる」の割合は93%以上であり、学生の評価からみた「演習到達度」は概ね高く、また、小児看護論実習経験の有無による違いも認められなかった。因子分析で抽出された3因子、〈看護ケアの実践〉、〈看護ケアの根拠づけ〉、〈病気の子どものコミュニケーション〉は、看護実践に包含される基本的要素であり、各因子の内的整合性が認められた。

今回、実習経験の有無による得点には差が認められなかったことについて、これは、事前に関連する疾患や看護についての課題学習により全員が一定の知識をもっていたこと、演習グループは実習経験のある学生とない学生の混成であったことから学び合う機会となっていたことが考えられた。

「演習到達度」とロールプレイ時の役割との関連においては、役割による到達度に違いが認められ、特に患児役割の学生に比べ親役割の学生に学びの自己評価が低いことが示された。その理由として、以下の事が考えられた。一つ目は、演習の設定が患児と看護学生との援助関係を中心とした場面であったことである。ロールプレイの設定は、「患児の呼吸を安楽にするケア」において、学生が実践の場面で遭遇する困難「子どもが援助を嫌がる・拒否する」状況（谷口、石井、長谷川、長谷部、2012）を加えたものであった。そのため、ロールプレイは患児と看護学生間の援助関係が中心になってしまう状況が生じていたと言える。その場面で、親役割の学生は、親の気持ちを表現することと子どもの支援者および看護師からの支援を受ける人としての役割を求められていた。そのため、親役割の学生は、患児あるいは看護学生役割の学生に比べ、計画したケア内容や方法について実感や確認が出来にくかったこと、また看護ケアに親の視点がより深く加わり、学びの自己評価が低くなっていることが考えられた。二つ目は、親に関する学びを明らかにする評価項目が少なく、親役割の学生の学びを適切に評価できていない可能性があったことである。親役割の学生の学びとして、親とのコミュニケーションや援助関係などが予測されるが、今回の調査では、〈親へのケアや配慮について学ぶことができた〉の1項目だけであった。今後、親・家族への学生の学びを明らかにするような評価項目を追加し、役割による学びの特徴を明らかにすること、またロールプレイの演習に親の役割や支援を反映させることが必要であると考えられる。三つ目は、演習における役割選択に関する学生の特性や志向である。今回の演習では、グループメンバーは教員が設定したが、役割はグループ内での学生の決定によるものであった。その

ため、役割としての方向性が不明瞭な親役割を選択した学生は、自己評価を低く報告する傾向にあったことも考えられる。以上のことから、役割における学生の学びやその特徴についてはさらに検討し、演習内容に反映させていくことが必要と考えられた。

3. 小児看護論実習との関連

実習経験のない学生においては、全員が実習に向けての準備となったと回答し、自由記述においても同様な記載がみられ、目前に控えた小児看護論実習の準備学習として有効であると捉えられていた。実習前のロールプレイ演習が小児看護論実習の準備として有効なことは、既に先行研究（花房、小泉、草柳、草場、2014）で明らかにされているが、今回は、〈小児看護論実習を終えた学生の経験から学ぶことができた〉の評価にみられるように、実習経験をもつ学生とのグループワークがこれから実習に向かう学生にとって実習準備として有効となる要因として考えられた。

実習経験のある学生においては、質問紙調査と自由記述から大半の学生は実習の経験が活かされた、深められたと本シミュレーション演習を捉えていたが、低く評価した学生も15%みられた。〈実習での経験が活かされた〉と〈学習が深まった〉の項目間に関連がみられ、実習での経験が演習事例の年齢、疾患、ケアの内容などと違っていた、あるいは違うと認識した学生の中に実習の深まりへと繋がらなかった可能性が考えられた。このためには、小児看護として汎用化されやすい事例や課題を選定し作成することと同時に、学生が自分の体験に看護としての共通性を見出していくことができるような支援が必要と考えられる。

4. 教育プログラムの洗練に向けての課題

事例のイメージ化については、子どものイメージを広げることへの支援、親の役割についての演習への位置づけを明確にすることが必要と考えられた。さらに子どもの状況を理解するための方法として、ビデオ活用の効果などの報告がなされており、演習の目的にそった提示方法の検討が課題となった。

演習に関連する環境の整備として、臨床の場に類似した状況に近づけることが求められる。学生たちは、ケア用具の作成だけでなく、医療機器を模造紙などで作成し臨床での実践に近い状況を作る努力をしていた。さらに、患児役を他のグループのメンバーが演じる方法という提案もあるなど、学生はロールプレイをリアリティのあるものとして実践する志向を明確にもっていることが推察された。そのためにも、学生からの要望にもあったように、事例の患児が受けている治療に関連した機器の準備など、環境の整備が課題となった。

小児看護領域において演習の評価はレポートなどが多く、活用できる尺度を見出すことはできなかったため、今回使用した質問紙「演習過程の評価」と「演習到達度」は、著者らが先行研究を参考に作成した尺度である。因子分析を用いての因子構造、Chronbach' α による信頼性については確認しているが、併存する他の尺度との関連の検討はしていない。個人差を見るためには適切とはいえない天井効果を示す項目が、「演習過程の評価」では9項目中2項目に、「小児看護論実習の準備」では2項目中2項目に含まれていた。これらの項目については、教員が学生にデータ収集を実施することによるバイアスを減らすことや評価内容の表現を検討することが必要と考える。また「演習到達度」については、親に関する学びなど演習目標に照らした項目の選定や追加が必要であることが明らかになった。このことから、併存する他の尺度との関連の検討も含めた尺度の洗練が必要である。

VII. 結 語

シミュレーション教育方法を用いた演習、小児の“呼吸を安楽にする援助”における教材および演習授業の展開の適切性について、受講学生の評価をもとに検討した結果、次のことが明らかになった。

1. 「演習過程の評価」は、〈教材の適切性〉、〈演習への取り組み〉の2因子で構成されており、学生は概ねレディネスに見合ったものとして評価していた。
2. 「演習到達度」は、〈看護ケアの実践〉、〈看護ケアの根拠づけ〉、〈病気の子どものコミュニケーション〉で構成されていた。ロールプレイ時の役割別の得点は、高い順に患児、看護学生、親であり、患児役割の学生は親役割の学生に比べ有意に高かった。
3. 小児看護論実習との関連で演習の学びをみると、演習の時期が小児看護論実習前の学生は「実習の準備」として、既に実習が終わった学生は「実習を深める」ものとして評価していた。
4. ロールプレイ後の振り返りは、グループ学生間、グ

ループ外の学生、教員との対話や討議によって、計画し実践したケアを確認し評価する学習支援になっていたことが推察された。

5. 教育プログラムの洗練のための課題としては、小児看護に関連する親の状況を加えた事例の提示、より実践の場に類似した演習環境の整備、「演習過程の評価」と「演習到達度」の項目の検討が明らかになった。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に厚くお礼を申し上げます。

文献

- 阿部幸恵 (2013). 臨床実践力を育てる! 看護のためのシミュレーション教育. 東京: 医学書院.
- Blair G., & Imai K. (2012). Statistical Analysis of List Experiments. *Political Analysis*, 20, 47-77. 参照先: <http://imai.princeton.edu/research/files/listP.pdf> 最終アクセス 2015.11.9
- D.L. ウルリッチ, K.J. グレンドン, 高島尚美著 (2012). 看護学教育におけるグループ学習のすすめ方. 東京: 医学書院.
- 舟嶋なをみ, 杉森みどり (2000). 看護学教育評価論—質の高い自己点検・評価の実現—. 東京: 文光堂.
- 花房伊保里, 小泉麗, 草柳浩子, 草場ヒフミ (2014). 看護基礎教育課程における小児看護技術演習に関する現状と課題—2001年～2012年に発表された文献の分析—. 武蔵野大学看護学部紀要, 8, 41-50.
- 服部佐知子, 谷口恵美子, 長谷川桂子, 石井康子 (2012). 「小児の観察とアセスメント演習」での学生の学びの特徴, 岐阜県立看護大学紀要, 12(1), 17-23.
- 厚生労働省 (2011). 厚生労働省看護教育の内容及方法に関する検討会. 参照先: <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q.html> 最終アクセス 2015.11.9
- 大木伸子, 出野慶子, 中尾秀子, 長岡裕子, 本間照子 (2002). 小児看護学技術演習における学生の体験と学び—学生のレポート内容の分析より—, 東邦大学医学部看護学科・東邦大学医学部短期大学紀要, 16, 47-57.
- 谷口恵美子, 石井康子, 長谷川桂子, 長谷部貴子 (2012). 小児看護実習前に行う技術演習での学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 12(1), 33-40.